

幼稚園の遊具

東京女子高等師範學校教授

佐々木等

幼兒の生命は何を考へて居りますか、日々園内に生活を捧げて居られる幼稚園の保姆諸君は何んだ話らないことを今時此様に泡を噴いて居る閑な奴も居るものだとお言ひになる方もあるでありませんが、筆者はそんな輕薄な了簡で

眞劍なのであります。生命に關して眞劍にならない者は生きとし生けるものではないのであります。もしそれ眞劍になれないとすれば其の人は死んで居るのも同然なのであります。生命に係はる問題に對しては萬人等しく強い興奮を感ずるのが常であります。

兵隊さんに慰安の爲文化映畫として淨瑠璃や、浪曲節や、へなくした舞踊や、落語など名人集でも見せた時、皇軍の佛印進駐の勇壯なる光景や、ぶんく喰る荒鷲隊の活躍する光景を見せた時の感情はさうであらうか、前者に對しては大して興奮を感じないのに反して後者に對しては熱狂する程になるのであります。之れは實際的の證明であ

つて、紙上の空想ではないのであります。その熱狂に對する感情の學問的分析は暫らく措いて、こうした事實は何によつて決定されたかといふに兵隊さん達の生命に強い印象を與へるからであります。

それは生命に關したことに對して眞劍なものであるといふ説明の引例であります。幼兒の生命として何を考へてお出になるかを私は尋問したのであります。

しかし、今直ぐ誰も答へて呉れないからぢれつたくなる。さて幼兒の生命は？といふことについて私は『遊』である三極めて明確に斷言するのであります。誰が何と言はうが、私は幼兒の生命は『遊』である三答へるのであります。

此の遊が幼兒の生命である三すれば『幼兒の生命は？』といふ問題は一應解決したわけでありませんが、此の幼兒の遊といふものは決して單純なものではないのであります。遊びの學說なきを引張り出したります三夏の日は長いといひますが全く日も尙ほ足りないことゝなりますからそんなこ

こには塵ほぎも觸れないで、目の前に現はれて居る彼等の遊びはどんな意味を持つて居るのか、又どんな欲求から行はれて居るのかを私の獨斷的な觀點から申述べて見たいと思ふ。

私の獨斷でありますから全部が全部確かなものと思はないで寧ろ疑問を持つて讀んで頂きたいと思ひます。殊に私は既に幼児を扱つて居りませんし、現に家庭に幼児を持つて居りませんから、是迄に目に映じたこゝ、或はこうあるべきであるこゝふ様なこゝについて述べるこゝにしたと思ひます。

只、私は幼児に對して興味を持つて居るこゝいふこゝ、國家が人口問題を云爲する時に、生めよ殖やせよ、母子を保護せよといつて居る矢先でありますこゝが丁度私の考へて居るこゝと一致して居りますので、案外樂な氣持でペンを執つて居るのであります。しかし、問題は極めて重大な問題なのであります。

幼児の遊具 幼児の遊具としてどんなものがあるかこゝいふこゝについては私よりも寧ろ保姆諸君の方が遙かに明るいのでありますから、詳しく申述べる必要がないのでありませうが念佛の積りで讀んで貰ひたいと思ひます。

幼児の遊具は春・夏・秋・冬季節の變化によつて使用されるものが違つて來るのが普通であります。尤も、一年中利

用される遊具もありますが概して變化があるものであります。

先づ幼児の最も關心を持つ遊具はどんなものかこゝいふこゝ『二臺』箱の附いた『鞆繩』登極』などでありませう。

二臺 身體的效果、此の二臺の遊びは全身的の運動であつて、臺に登る爲めには兩手を使つて體を支へながら登つて行かなければならない。階段に登る爲めに一段宛踏みしめて足を上の方へ運ぶのでありますから、これは脚部の發育をはかるこゝとなるのであります。こゝろが、此の脚を上にあげる運動こゝいふのも同時に腹の運動となるのであります。腹筋を強くするこゝとなるのであります。幼児の消化器は大人と比べものにならないほゞ小さなものでありませうがしかし、形は小さくとも數は一人前の内臟諸器官を腹部に臟して居るのでありますから、その臟器をして完全に發育せしめる爲めにはさうしても腹部の運動が必要になつて來るのであります。

こゝろした腹部の運動によつて内臟諸器官の教育を促進するやうに彼等は有意的に行つて居るのではありません。彼等は發育しなければならぬ自然的の欲求から殆んど衝動的に行つて居るのであります。しかし、彼等を誘導する先達者である保姆諸君はこの事を十分理解して居なければならぬのではないかと思ふのであります。

さてその二臺の運動は兩臂を使つて臺に登つて行く際に
 どんな體育的效果があるかといふに、臂を使ふといふこ
 は彼等の身體を安全に保つといふ爲めなるものであつ
 て、所謂生命の保護なのであります。考へて見ますと、
 身體の安全といふことは體育上最も大切な事であつて、體
 育的に考へて身體を毀損するといふほゞ下手なことはな
 いのであります。故に安全に身體を保つことの如何に大切
 なるかといふことは彼等は無自覺的に知つて居るのであり
 ます。

その兩臂を交る々々使つて體を上引上げて行く際に身
 體の舉上力即ち懸垂力が養はれるばかりでなく、脚を上
 あげる時に腹部の體育的效果を期待し得られると同様に、
 此の臂を使用する時は上體即ち胸部の發育を促進するこ
 となるのであります。

胸部の發育といふことは一體どんなことをいふのであり
 ませう。それは胸廓を擴大することゝなるばかりでなく、
 胸廓内にある諸臓器の正常なる發達を促進することゝなる
 ものであります。又、呼吸などに於ける胸廓の可動性を大
 にするといふことは瓦斯交換を容易ならしむるものとして
 大切なことなのであります。

胸廓は吾々の生命の根源的な活動體の寶庫なのでありま
 すから此の部の發育が良好なることはその生命の伸展を意

味することになるのであります。

そうした意味に於て此の不知不識の間に彼等が行つて居
 る二臺の運動といふものが如何にその個體に取つて意義深
 い運動であるかゞわかるのであります。

又二臺といふことは全身の平衡運動でありますから身體
 的に故障のあるものには出来ないものもあるのでありま
 す。以上は二臺運動の身體的方面的效果について述べたの
 であります。精神的効果については又、諸君の觀察に確
 かな記録が出来て居ることゝ思ふのであります。これにつ
 いて私の考へを述べて見たいと思ふ。

彼等は未だ嘗て經驗したことはないものに對して直面す
 る時、そのものに對して無雜作にやつてのける場合と、い
 やに慎重に立向ふ場合とあることに氣付くであります。
 う。この二臺の好きなものも始めて見た時はどんな様子
 するものであるかといふことについて觀察して見ますと、
 彼等は先づ不安そうな氣持で眺めて居るに違ひないの
 であります。

そこで仲間の誰か經驗者が易々登つて易々二つて行
 く様子を見ては己れもやつて見たいといふ感じを持つに違
 ひない。そして試みることは一段二段三段段々に登つ
 て行く、その時の態度は眞剣そのものであつて、臆病なも
 のは冷汗を流しながら登りつめる。登りつめて先づ々々ほ

つみしたさいふ感じを表現するのを見られるでせう。

幼児はそれでも段を登るこゝは割合にらかな運動らしいのであるが、経験のないさいふこころから不安を持つものらしいのであります。一度臺上に登つて仕舞へば今度は迂るこゝの恐ろしさがこみ上げて来る、容易に迂らうとするものではない。

はたから激勵され、誘導されて漸やく體の重心を低くして迂り始める。それが誠に恐はしい態度であるこゝがわかるのであります。それが完全に迂り下りて、然かも生命に對して安全であるさいふこゝがわかるこゝ、ホツツするらしいのであります。

しかし大抵の子供は、始めて迂臺を滑り下りた時にどんな様子をするかさいふに、必ず自分の迂つて来た方に向つてぢつとそれを見入るのに氣付くであります。

それが二三回試みる間は未だ十分安心しない様子であります、漸次馴れて来るに全く自信力がついて、今度は平氣で登つては迂り登つては迂りする様になるのであります。こうなつて来るに全くらかな氣持でやれる様な自信を持つやうになるのであります。

一體幼児さいふものは、高いこゝろに登るこゝを好むものであります。それは何故であるかさいふに私の考へでは幼児は大人なごゝ比較するに視野が狭いのであります。視

野の狭いさいふこゝは生命伸展の上に不十分な點があるのであります。出来るだけ視野を廣くしたいに念願するのが彼等の本能なのであります。従つて高いこゝろに登りたがるものであると思ふのであります。又彼等は高いこゝろに登るこゝは上體の發育を必要とする自然的欲求とも見られるのであります。之れはほんの私の獨斷であります。

かやうに彼等は迂臺によつて全生命の伸展をはかつて居るのであるさいふこゝを考へるに、この遊を簡單に片付けられないさいふこゝがわかるのであります。

その迂臺は一體さんな大きさのものがよいだらうかさいふこゝになるのであります、幼児に對しては高さが一米五十糎乃至二米位で、迂る長さは二米から三米位が適當ではないかと思ふ。此の設備ばかりではありませんが新らしい中はよいにしても段々古くなるに破損箇所が出て来るものでありますから、特に手に刺をさしたりするやうなこゝのない様に時折検査するこゝが必要であります。

こうした迂臺を幼児の數二十人に對して一臺位の割につくられたらよいと思ひます。經濟的に多勢一時に迂らせやうにして廣い迂臺をつくつて居るこゝろもありませんが、あれは子供には感心したものではありません。幼児には一人宛迂る様に設備せらるべきであります。

以上迂臺についての概略を述べました。(八・六)